

編集後記

7月1日が投稿申し込みの締切りですが、今回は12件の応募がありました。果たして何件の応募があるかいつも不安な気持ちで見守っているこちらとしては、うれしい驚きでした。しかし、研究所の研究員が毎年抛出する研究参加費（早稲田の専任教員でもある専任研究員は2万円、学外の招聘研究員は1万円）で刊行費用の大半を賄っているため、あまり多くの原稿を掲載することはできません。現在専任研究員は9名、招聘研究員は29名が登録されていますが、全員が研究参加費を払い込んでくれるとは限りません。そこで、編集委員会で協議した結果、前年度に投稿された方1名と過去に4回投稿されている方1名には事前に投稿を辞退していただくことにしました。ただ、原稿を募集しておきながら、こんなふうに門前払いにすることを疑問視する声も寄せられました。次回からはそういうこともありうることを投稿募集の文言に加えることにしました。

このように2人の方に辞退いただいたとしても、まだ10本の原稿が届く可能性はあります。査読者がそのすべてに掲載可の判定を下した場合はどうすればよいのか、そんなことを危惧しながら成り行きを見守っていたところ、10月1日の締切りまでに届いたのは6本だけでした。前にもこういうことはありましたが、今回は事前に辞退いただいた方がいるにもかかわらずこういうことになり、ほっとすると同時に割り切れないものを感じました。1人の方からは梨の礫でした。こちらは苦労して査読者を確保し、査読を頼まれた方はそのための準備を進めていたかもしれません。一言挨拶があっても良いのではと思ったりもしました。

このような経過をたどり、6本のうち1本は掲載不可の判定が下り、3本は論文として、2本は研究ノートとして掲載することに決まりました。査読外の扱いのイタリア人研究者2名の講演原稿の翻訳を加えて適正な規模に収まりました。テーマも歴史、文学、美術、建築と多岐に渡っています。

編集委員会

池上公平 奥田耕一郎 小林 勝 白崎容子 高橋利安 辻 昌宏
西村安弘 濱口オサミ 福山佑子 古田耕史 三森のぞみ 渡辺有美